

# 離散可積分系入門 (I)

## (An introduction to discrete integrable systems)

笥 三郎 (立教大学理学部)

九州大学産業技術数理研究センター 第9回ワークショップ  
離散可積分系・離散微分幾何チュートリアル

2010年2月22日(月)

## Outline

### 微分方程式の「差分化」

「差分化」とは何か？

ロジスティック方程式の差分化

### 戸田格子の差分化

双線形形式による差分化

ソリトン解の構成

双線形方程式から非線形方程式へ

### Part I のまとめ

## §1.1. 微分方程式の「差分化」

微分方程式を「差分化」するとは何をすることかを、

- 指数関数の満たす微分方程式
- ロジスティック方程式

という2つの例で説明する.

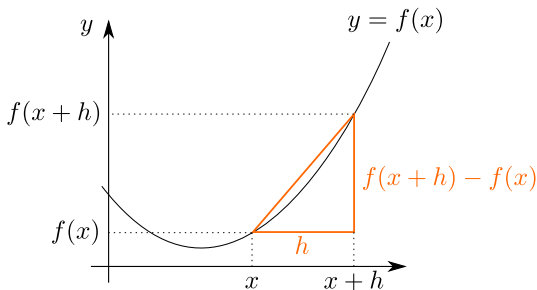
「差分化」 = 「離散化」 = “discretization”

「差分化」とは何か？

## 微分 vs 差分

関数  $f(x)$  の導関数 (高校の復習)

$$\frac{df(x)}{dx} = \lim_{h \rightarrow 0} \frac{f(x+h) - f(x)}{h}$$



「差分化」とは何か？

## 微分 vs 差分

関数  $f(x)$  の導関数 (高校の復習)

$$\frac{df(x)}{dx} = \lim_{h \rightarrow 0} \frac{f(x+h) - f(x)}{h}$$

言い換えると,  $h$  が 0 に近いときは,

$$\frac{df(x)}{dx} \doteq \frac{f(x+h) - f(x)}{h}$$

微分

(前進) 差分

であるということ.

「差分化」とは何か？

## 指数関数 vs 等比数列 (高校の復習)

等比数列 (初項  $a$ , 公比  $r$ )

$$\{ar^{n-1}\}_{n=1,2,3,\dots} = \{a, ar, ar^2, ar^3, ar^4, \dots\}$$

この等比数列の満たす漸化式 (差分方程式) :

$$a_{n+1} = ra_n$$

## 指数関数

$$f(x) = e^{kx} \quad (\text{ネイピア数 } e = 2.718281828\dots, k \text{ は定数})$$

この指数関数の満たす微分方程式 :

$$\frac{df(x)}{dx} = k f(x)$$

「差分化」とは何か？

## 指数関数 vs 等比数列 (「方程式」からながめる)

指数関数  $f(x) = e^{kx}$  ( $k$  は定数) の満たす微分方程式の「差分化」

$$\frac{df(x)}{dx} = k f(x) \xrightarrow[\text{(前進差分)}]{\text{差分化}} \frac{f(x+h) - f(x)}{h} = k f(x)$$

書き換えると,

$$f(x+h) = (1+kh)f(x)$$

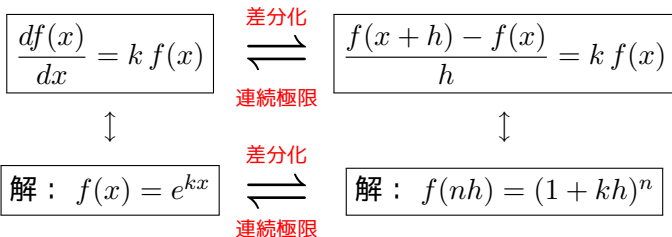
なる差分方程式 (漸化式) が得られる. すなわち, 数列

$$\{f(nh), n \in \mathbb{Z}\} = \{\dots, f(-h), f(0), f(h), f(2h), \dots\}$$

は, 公比  $r = 1 + kh$  の等比数列である.

「差分化」とは何か？

## 指数関数 vs 等比数列 (「方程式」と「解」からながめる)



公式  $e = \lim_{z \rightarrow 0} (1 + z)^{1/z}$  ( $e$  の定義) より,  $x = nh$  とおくと,

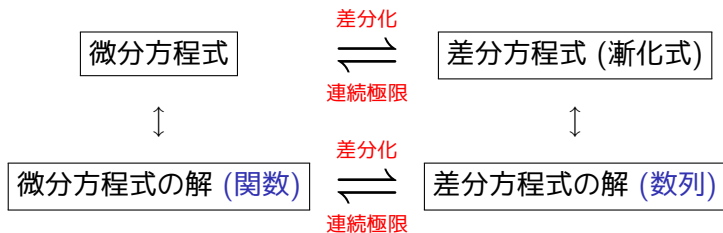
$$f(nh) = (1 + kh)^n = \left\{ (1 + kh)^{1/kh} \right\}^{kx} \xrightarrow{h \rightarrow 0} e^{kx}$$



「差分化」とは何か？

## 微分方程式の「差分化」

「差分化」 = 「離散化」 = “discretization”



## 典型的な例



## 「差分化」とは何か？

## 差分化いろいろ

「微分」を「差分」に置き換える方法は無数にある。

- ▶ 前進差分：
$$\frac{f(x+h) - f(x)}{h} \xrightarrow{h \rightarrow 0} \frac{df(x)}{dx}$$
- ▶ 後退差分：
$$\frac{f(x) - f(x-h)}{h} \xrightarrow{h \rightarrow 0} \frac{df(x)}{dx}$$
- ▶ 中心差分：
$$\frac{f(x+h) - f(x-h)}{2h} \xrightarrow{h \rightarrow 0} \frac{df(x)}{dx}$$

また、次のような「乗法的」差分化も考えられる。

- ▶  $q$  差分：
$$\frac{f(x) - f(qx)}{x(1-q)} \xrightarrow{q \rightarrow 1} \frac{df(x)}{dx}$$

**[演習]** 指数関数の微分方程式を、上のそれぞれのやり方で差分化し、得られた差分方程式の解を求めよ。

## もう少し難しい例：ロジスティック方程式

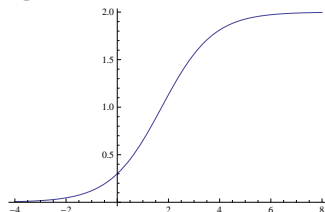
$$\frac{df(x)}{dx} = \alpha f(x) \{1 - \beta f(x)\} \quad (\alpha, \beta \text{ は定数})$$

$\beta = 0$  とすると、さきほどの微分方程式 (指数関数).

この微分方程式は「変数分離法」で解ける.

解：

$$f(x) = \frac{f(0)e^{\alpha x}}{\beta f(0)e^{\alpha x} + 1 - \beta f(0)}$$



「ロジスティック曲線」 or 「S字曲線」

## ロジスティック方程式の差分化 1

$$\frac{df(x)}{dx} = \alpha f(x) \{1 - \beta f(x)\} \quad (\alpha, \beta \text{ は定数})$$

差分化 1 (前進差分)

$$\frac{f(x+h) - f(x)}{h} = \alpha f(x) \{1 - \beta f(x)\}$$

$$\Leftrightarrow f(x+h) = (1 + \alpha h) f(x) - \alpha \beta h f(x)^2$$

$$\Leftrightarrow g_{n+1} = a g_n (1 - g_n) \quad (\text{ロジスティック写像})$$

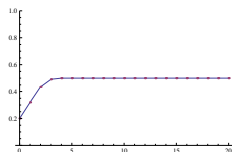
$$\text{ただし } g_n = \frac{\alpha \beta h}{1 + \alpha h} f(nh), \quad a = 1 + \alpha h \quad \text{とおいた.}$$

## ロジスティック方程式の差分化 1

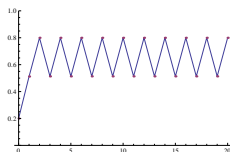
$$\text{ロジスティック写像: } g_{n+1} = a g_n(1 - g_n) \quad (0 < a \leq 4)$$

(条件  $0 < a \leq 4$  は区間  $[0, 1]$  内におさめるため)

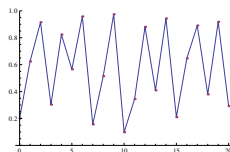
$a = 2.0$



$a = 3.2$



$a = 3.9$



パラメータによっては不規則な振動が発生  $\Rightarrow$  「カオス」

R.M. May, "Simple mathematical models with very complicated dynamics",

*Nature* **261** (1976), 459–467.

**[演習]** 「後退差分」, 「中心差分」で計算するとどうなるか?

## ロジスティック方程式の差分化 2

ロジスティック方程式の解：  $f(x) = \frac{f(0) e^{\alpha x}}{\beta f(0) e^{\alpha x} + 1 - \beta f(0)}$

これを  $e^{\alpha x}$  について解くと,

$$e^{\alpha x} = \frac{1 - \beta f(0)}{f(0)} \frac{f(x)}{1 - \beta f(x)} = (\text{定数}) \times \frac{f(x)}{1 - \beta f(x)}$$

となる. このことから,

$$g(x) = \frac{f(x)}{1 - \beta f(x)}$$

は, 次の微分方程式を満たすことがわかる.

$$\frac{dg(x)}{dx} = \alpha g(x)$$

## ロジスティック方程式の差分化 2

$$\frac{df(x)}{dx} = \alpha f(x) \{1 - \beta f(x)\} \quad \xrightarrow{g(x) = \frac{f(x)}{1 - \beta f(x)}} \quad \frac{dg(x)}{dx} = \alpha g(x)$$

↓ 前進差分

$$\boxed{\frac{f(x+h)}{1 - \beta f(x+h)} = \frac{(1 + \alpha h) f(x)}{1 - \beta f(x)}} \quad \xleftarrow{g(x) = \frac{f(x)}{1 - \beta f(x)}} \quad \frac{g(x+h) - g(x)}{h} = \alpha g(x)$$

整理すると、次の関係式が得られる。

$$\frac{f(x+h) - f(x)}{h} = \alpha f(x) \{1 - \beta f(x+h)\}$$

Cf. M. Morisita, "The fitting of the logistic equation to the rate of increase of population density", *Res. Popul. Ecol.* **VII** (1965), 52–55.

## 差分化 1, 差分化 2 の比較

- ▶ 差分化 1: そのまま (前進) 差分化

$$\frac{f(x+h) - f(x)}{h} = \alpha f(x) \{1 - \beta f(x)\}$$

(パラメータによっては) カオス的な挙動を示す.

- ▶ 差分化 2: 変数を置き換えてから (前進) 差分化

$$\frac{f(x+h) - f(x)}{h} = \alpha f(x) \{1 - \beta f(x+h)\}$$

パラメータが大きくても “S 字曲線” を再現する.

以下では, 差分化 2 のような **元の解の性質を保つ差分化** に注目.



## 『無限・カオス・ゆらぎ』より

寺本英・広田良吾・武者利光・山口昌哉の4名による対談（培風館，1985）

(41 ページ，広田先生が「差分化」に関する自身の研究を紹介したのを受けて，)

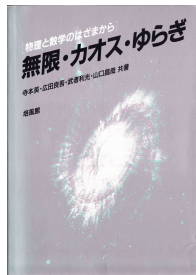
山口 僕と非常に対照的です。微分方程式を discrete に直したら，微分方程式の解とまったくちがう性質がでてくる，ということを追っている。

武者 広田さんの仕事は，非常に体系的です。いいですね。

広田 僕は，逆に 元の微分方程式の解の性質を保存する ように，どう差分化したらいいか，ということです。

… 《中略》 …

山口 1つの微分方程式に対して差分化は無限にある。そのいい方をとったら非常に体系的な議論ができる。微分方程式と同じような体系的な議論ができる，というのは広田さんの立場。

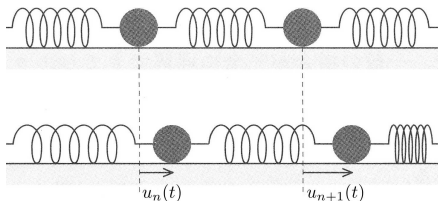


## §1.2. 戸田格子の差分化

戸田格子方程式に対して、前節のロジスティック方程式の「差分化2」のように、解の持つ性質を保存するような差分化を考察する。

## 戸田格子方程式 (復習)

$u_n(t)$  : 時刻  $t$  における  $n$  番目の質点のつり合いの位置からのずれ



$$\text{運動方程式 : } m \frac{d^2 u_n(t)}{dt^2} = a \left[ e^{-b\{u_n(t)-u_{n-1}(t)\}} - e^{-b\{u_{n+1}(t)-u_n(t)\}} \right]$$

変数を適当にスケールすれば, 次のように  $m = a = b = 1$  とすることができる.

$$\frac{d^2 q_n(t)}{dt^2} = \left[ e^{-\{q_n(t)-q_{n-1}(t)\}} - e^{-\{q_{n+1}(t)-q_n(t)\}} \right]$$

## 戸田格子方程式 (復習) : いろいろな表示

$$\frac{d^2 q_n(t)}{dt^2} = \left[ e^{-\{q_n(t) - q_{n-1}(t)\}} - e^{-\{q_{n+1}(t) - q_n(t)\}} \right]$$

$$\downarrow V_n(t) = e^{q_n(t) - q_{n+1}(t)}$$

$$\frac{d^2}{dt^2} \log [1 + V_n(t)] = V_{n+1}(t) + V_{n-1}(t) - 2V_n(t)$$

$$\downarrow V_n(t) = \frac{d^2}{dt^2} \log f_n(t)$$

$$\ddot{f}_n(t) f_n(t) - \left\{ \dot{f}_n(t) \right\}^2 = f_{n+1}(t) f_{n-1}(t) - \left\{ f_n(t) \right\}^2$$

\* どの変数で差分化を行うかによって、性質は変わってくる。

## 戸田方程式の広田表示 (双線形方程式)

$$\ddot{f}_n(t)f_n(t) - \left\{ \dot{f}_n(t) \right\}^2 = f_{n+1}(t)f_{n-1}(t) - \{f_n(t)\}^2$$

左辺は **連続** 変数  $t \in \mathbb{R}$  に関する **微分**,  
 右辺は **離散** 変数  $n \in \mathbb{Z}$  に関する **差分**.

⇒ 左辺も**差分化**したい.

## 「良い差分化」の1つの例

$$\frac{f_n(t + \delta)f_n(t - \delta) - \{f_n(t)\}^2}{\delta^2} = f_{n+1}(t)f_{n-1}(t) - \{f_n(t)\}^2$$

R. Hirota, Nonlinear partial difference equations. II. Discrete-time Toda equation,  
*J. Phys. Soc. Jpn.* **43** (1977), 2074–2086.

## 離散戸田格子方程式 (双線形形式での連続極限)

[広田 (1977)]

$$\frac{f_n(t + \delta)f_n(t - \delta) - \{f_n(t)\}^2}{\delta^2} = f_{n+1}(t)f_{n-1}(t) - \{f_n(t)\}^2$$

$$\begin{aligned} \text{左辺} &= \underbrace{\frac{f_n(t + \delta) - 2f_n(t) + f_n(t - \delta)}{\delta^2}}_{\text{中心差分}} \cdot f_n(t) - \underbrace{\frac{f_n(t + \delta) - f_n(t)}{\delta}}_{\text{前進差分}} \cdot \underbrace{\frac{f_n(t) - f_n(t - \delta)}{\delta}}_{\text{後退差分}} \\ &\longrightarrow \ddot{f}_n(t)f_n(t) - \{\dot{f}_n(t)\}^2 \quad (\delta \rightarrow 0) \end{aligned}$$

極限  $\delta \rightarrow 0$  をとると元に戻る.

## 離散戸田格子方程式 (双線形形式)

[広田 (1977)]

$$\frac{f_n(t + \delta)f_n(t - \delta) - \{f_n(t)\}^2}{\delta^2} = f_{n+1}(t)f_{n-1}(t) - \{f_n(t)\}^2$$

この差分化は、元の「戸田格子方程式」が持っていた「良い性質」を受け継いでいる。

- ▶ 「連続極限」をとると元に戻る。
- ▶ 「 $N$  ソリトン解」, 「代数幾何的解」を持つ。

## 1 ソリトン解 (連続の場合の復習)

もとの (連続の) 方程式 :

$$\ddot{f}_n(t)f_n(t) - \left\{ \dot{f}_n(t) \right\}^2 = f_{n+1}(t)f_{n-1}(t) - \{f_n(t)\}^2$$

“1 ソリトン解”

$$f_n(t) = 1 + \varepsilon f_n^{(1)}(t)$$

この  $f_n^{(1)}(t)$  は次の線形方程式を満たすように選ぶ :

$$\ddot{f}_n^{(1)}(t) = f_{n+1}^{(1)}(t) + f_{n-1}^{(1)}(t) - 2f_n^{(1)}(t)$$

具体的には, 次のような指数関数を選べばうまくいく :

$$f_n^{(1)}(t) = e^{pn+qt}, \quad q = e^{\frac{p}{2}} - e^{-\frac{p}{2}} = P - \frac{1}{P} \quad (P = e^{\frac{p}{2}})$$



## 1 ソリトン解 (差分の場合)

差分化した方程式：

$$\frac{f_n(t+\delta)f_n(t-\delta) - \{f_n(t)\}^2}{\delta^2} = f_{n+1}(t)f_{n-1}(t) - \{f_n(t)\}^2$$

“1 ソリトン解”  $f_n(t) = 1 + \varepsilon f_n^{(1)}(t)$ この  $f_n^{(1)}(t)$  は次の線形方程式を満たすように選ぶ：

$$\frac{f_n^{(1)}(t+\delta) + f_n^{(1)}(t-\delta) - 2f_n^{(1)}(t)}{\delta^2} = f_{n+1}^{(1)}(t) + f_{n-1}^{(1)}(t) - 2f_n^{(1)}(t)$$

具体的には、次のような等比数列を選べばうまくいく：

$$f_n^{(1)}(t) = P^{2n}Q^{2t/\delta}, \quad Q - \frac{1}{Q} = \delta^2 \left( P - \frac{1}{P} \right)$$

## 2 ソリトン解, 3 ソリトン解

## 2 ソリトン解

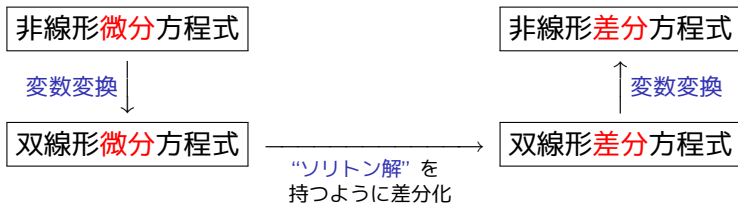
$$f_n(t) = 1 + \varepsilon \{E_1(n, t) + E_2(n, t)\} + \varepsilon^2 A_{12} E_1(n, t) E_2(n, t)$$

## 3 ソリトン解

$$f_n(t) = 1 + \varepsilon \{E_1(n, t) + E_2(n, t) + E_3(n, t)\} \\ + \varepsilon^2 \{A_{12} E_1(n, t) E_2(n, t) + A_{13} E_1(n, t) E_3(n, t) + A_{23} E_2(n, t) E_3(n, t)\} \\ + \varepsilon^3 A_{12} A_{13} A_{23} E_1(n, t) E_2(n, t) E_3(n, t)$$

	$E_j(n, t)$	関係式	$A_{ij}$
連続	$c_j P_j^{2n} e^{q_j t}$	$q_j = P_j - \frac{1}{P_j}$	$\left(\frac{P_i - P_j}{1 - P_i P_j}\right)^2$
離散	$c_j P_j^{2n} Q_j^{2t/\delta}$	$Q_j - \frac{1}{Q_j} = \delta \left(P_j - \frac{1}{P_j}\right)$	$\frac{-\left(\frac{Q_i}{Q_j} - \frac{Q_j}{Q_i}\right)^2 + \delta^2 \left(\frac{P_i}{P_j} - \frac{P_j}{P_i}\right)^2}{\left(Q_i Q_j - \frac{1}{Q_i Q_j}\right)^2 - \delta^2 \left(P_i P_j - \frac{1}{P_i P_j}\right)^2}$

## 双線形形式に基づく差分化の“レシピ”



Ryogo Hirota, Nonlinear partial difference equations.

- I. A difference analogue of the Korteweg-de Vries equation, *J. Phys. Soc. Jpn.* **43** (1977), 1424–1433.
- II. Discrete-time Toda equation, *J. Phys. Soc. Jpn.* **43** (1977), 2074–2078.
- III. Discrete sine-Gordon equation, *J. Phys. Soc. Jpn.* **43** (1977), 2079–2086.
- IV. Bäcklund transformation for the discrete-time Toda equation, *J. Phys. Soc. Jpn.* **45** (1978), 321–332.
- V. Nonlinear equations reducible to linear equations, *J. Phys. Soc. Jpn.* **46** (1979), 312–319.

双線形方程式から非線形方程式へ

## 双線形形式から「V 表示」へ

[広田 (1977)]

$$\frac{f_n(t + \delta)f_n(t - \delta) - \{f_n(t)\}^2}{\delta^2} = f_{n+1}(t)f_{n-1}(t) - \{f_n(t)\}^2$$

ここで

$$V_n(t) = \frac{f_n(t + \delta)f_n(t - \delta) - f_n(t)^2}{\delta^2 f_n(t)^2} = \frac{f_{n+1}(t)f_{n-1}(t) - f_n(t)^2}{f_n(t)^2}$$

とおけば,

$$1 + \delta^2 V_n(t) = \frac{f_n(t + \delta)f_n(t - \delta)}{f_n(t)^2}, \quad 1 + V_n(t) = \frac{f_{n+1}(t)f_{n-1}(t)}{f_n(t)^2}.$$

双線形方程式から非線形方程式へ

## 双線形形式から「V 表示」へ

$$1 + V_n(t) = \frac{f_{n+1}(t)f_{n-1}(t)}{f_n(t)^2},$$

$$1 + \delta^2 V_n(t) = \frac{f_n(t + \delta)f_n(t - \delta)}{f_n(t)^2},$$

$$1 + V_n(t + \delta) = \frac{f_{n+1}(t + \delta)f_{n-1}(t + \delta)}{f_n(t + \delta)^2}, \quad 1 + \delta^2 V_{n+1}(t) = \frac{f_{n+1}(t + \delta)f_{n+1}(t - \delta)}{f_{n+1}(t)^2},$$

$$1 + V_n(t - \delta) = \frac{f_{n+1}(t - \delta)f_{n-1}(t - \delta)}{f_n(t - \delta)^2}, \quad 1 + \delta^2 V_{n-1}(t) = \frac{f_{n-1}(t + \delta)f_{n-1}(t - \delta)}{f_{n-1}(t)^2},$$

$$\Rightarrow \frac{\{1 + V_n(t + \delta)\} \{1 + V_n(t - \delta)\}}{\{1 + V_n(t)\}^2} = \frac{\{1 + \delta^2 V_{n+1}(t)\} \{1 + \delta^2 V_{n-1}(t)\}}{\{1 + \delta^2 V_n(t)\}^2}$$

離散戸田格子方程式 [広田 (1977)]

## 「V 表示」での連続極限

$$\frac{\{1 + V_n(t + \delta)\} \{1 + V_n(t - \delta)\}}{\{1 + V_n(t)\}^2} = \frac{\{1 + \delta^2 V_{n+1}(t)\} \{1 + \delta^2 V_{n-1}(t)\}}{\{1 + \delta^2 V_n(t)\}^2}$$

ここで,

$$\Delta_{t,\delta} F(t) = \frac{F(t + \delta) + F(t - \delta) - 2F(t)}{\delta^2},$$

$$\Delta_n F(n) = F(n + 1) + F(n - 1) - 2F(n),$$

という記法を用いると、次の形に書き換えられる：

$$\Delta_{t,\delta} \log [1 + V_n(t)] = \Delta_n \frac{\log [1 + \delta^2 V_n(t)]}{\delta^2}$$

## 「V 表示」での連続極限

$$\Delta_{t,\delta} \log [1 + V_n(t)] = \Delta_n \frac{\log [1 + \delta^2 V_n(t)]}{\delta^2}$$

ここで、 $\delta \rightarrow 0$  の極限を考えると、

$$\lim_{\delta \rightarrow 0} \Delta_{t,\delta} \log [1 + V_n(t)] = \frac{d^2}{dt^2} \log [1 + V_n(t)],$$

$$\lim_{\delta \rightarrow 0} \frac{\log [1 + \delta^2 V_n(t)]}{\delta^2} = V_n(t) \quad (\because x \doteq 0 \text{ なら } \log(1+x) \doteq x)$$

なので、連続の場合の方程式に戻る：

$$\frac{d^2}{dt^2} \log [1 + V_n(t)] = V_{n+1}(t) + V_{n-1}(t) - 2V_n(t)$$

## Part I のまとめ

次の3つの例に対して,

**解の持つ性質を保存するような差分化**

を考察した :

- ▶ 指数関数の満たす微分方程式
- ▶ ロジスティック方程式
- ▶ 戸田格子方程式